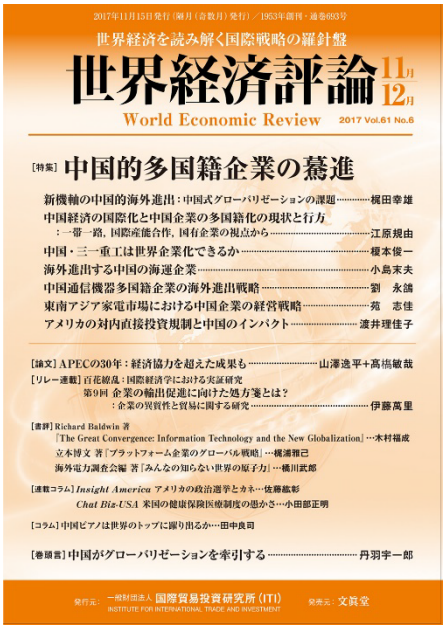
Back Number

本論文は

世界経済評論 2017 年11/12月号

(2017 年 11 月発行)

掲載の記事です


2017年11月15日発行（隔月（奇数月）発行）／1953年創刊・通巻653号

世界経済を読み解く国際戦略の羅針盤

世界経済評論 11月 12月

World Economic Review 2017 Vol.61 No.6

[特集] 中国的多国籍企業の驀進

新機軸の中国的海外進出：中国式グローバリゼーションの課題……梶田幸雄
中国経済の国際化と中国企業の多国籍化の現状と行方
：一帯一路，国際産能合作，国有企業の視点から……江原規由
中国・三一重工は世界企業化できるか……榎本俊一
海外進出する中国の海運企業……小島末夫
中国通信機器多国籍企業の海外進出戦略……劉　永鑄
東南アジア家電市場における中国企業の経営戦略……苑　志佳
アメリカの対内直接投資規制と中国のインパクト……渡井理佳子

[論文] APECの30年：経済協力を超えた成果も……山澤逸平＋髙橋敏哉
[リレー連載] 百花繚乱：国際経済学における実証研究
第9回 企業の輸出促進に向けた処方箋とは？
：企業の異質性と貿易に関する研究……伊藤萬里

[書評] Richard Baldwin 著
「The Great Convergence: Information Technology and the New Globalization」…木村福成
立本博文 著「プラットフォーム企業のグローバル戦略」…櫻澤雅己
海外電力調査会編 著「みんなの知らない世界の原子力」…横川武郎

[連載コラム] *Insight America* アメリカの政治選挙とカネ…佐藤嚴彰
Chat Biz-USA 米国の健康保険医療制度の思かさ…小田部正明

[コラム] 中国ピアノは世界のトップに躍り出るか…田中良司

[巻頭言] 中国がグローバリゼーションを牽引する……丹羽宇一郎

発行元：一般財団法人 国際貿易投資研究所（ITI） INSTITUTE FOR INTERNATIONAL TRADE AND INVESTMENT　発売元：文眞堂

世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
1,320円×6冊＝7,920円 ▶ 6,600円 税込

17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読期間中 デジタル版バックナンバー 読み放題!!

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]
0120-223-223

お支払い方法
Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp 雑誌のオンライン書店

Column　田中 良司

30年の発展過程　同じ業界で活動していた事情もあり，中国製ピアノを楽器店で見る機会はあったものの，本格的に向き合ったのは30年ほど前の1988年の中国・広州交易会会場でのことだった。また会場に近い国際展覧場で行われていた広州楽器フェアにも出向き，ピアノ製品群を「品評」しながら，香港の知人を通じて地元の国営ピアノ企業「広州ピアノ」参観をお願いしたところ，すぐに承諾の返事があり，幸運にも工場視察が実現した。

広州ピアノは現在では広州珠江ピアノ集団（パールリバーブランド）として世界最大の生産量を誇るピアノ製造企業である。当時から国内のトップブランドとして，中国製ピアノの品質，価格などで常に注目された代表企業でもあった。今日では考えられないが，同業の見学者に隠さず公開し，写真撮影まで許された。

中国製ピアノは今日，世界各地で販売され一定の評価を得ているが，こうして当時の製品との比較や進化を考察する上で，思えばこの工場参観は真に貴重な機会となった。工場見学では，案内者から「品質」に関する説明を度々耳にしたが，当時から自社の品質を「視察」してもらうことの重要さを彼らは心得ていた。予想外だったのは，ピアノの演奏機能を司る心臓部の「アクション」を自社生産していたことだ。当時の中国製ピアノの一般的なイメージは，所謂ローエンドの価格帯で括られた製品でコンソールタイプの竪型ピアノが主流だった。家庭でのピアノレッスンに不足はなくても，鍵盤タッチなどに見られるバラツキは部品の精度や生産ラインの作業から生じるもので，品質を強調する上では，その中身が問われるところともなるものだ。

その後，1992年から93年にかけて中国ピアノ製造企業数社を訪問する機会があった。有力国営企業の北京ピアノや上海ピアノ，東北ピアノとの交流では，中国製ピアノへの理解が深まり，ピアノ業界の現状や動向，将来の課題についても率直な対話ができた。再訪問した広州ピアノの生産ラインの様子や製品の完成度は想像以上だった。各企業共，海外の著名な工場や技術者との提携・交流を積極的に行っており，私の訪問目的－長期的な提携関係の模索－に応えるべく自社のPR，特に品質面での充実を強調していた。

中国ピアノは世界のトップに躍り出るか

旧満州の地，営口にある深い森に囲まれた東北ピアノは，直前にスウェーデンのピアノ会社を買収し，その生産設備を自社の生産ラインに配備していた。北京ピアノではドイツの著名なメーカーとの交流の様子が語られ，案内された北京中央音院にはピアノ技術等の関連資料が多く残されていた。品質向上への努力やその背景をなす動きを目のあたりにする思いだった。

生産量で世界トップに　中国製ピアノの歴史的経緯は，中国楽器協会発行の公報誌『中国楽器』にも詳述されている。公表データによれば，2000年の生産量は23万台，2003年には34万台を記録し，その後も毎年30万台を超える生産量を保持している。現在，国内にあるピアノの総台数は700万台といわれ，市場も今後さらに10年は経済発展の恩恵を受けると推定すれば1000万台も目前である。ちなみに日本のピアノ生産量のピークは1980年の39万台で，円高などでの

海外生産移転の結果，2015年の国内ピアノ生産量は3万6000台となった。広州珠江ピアノはその間，年間生産量10万台を記録し，世界で二番目に達成した偉業と伝えられた。同誌2017年第3期（3月号）には，同社が世界最大のピアノ製造企業として，国内最高の栄誉である全国製造業ゴールドメダルを受賞したと報じている。

伸び悩む輸出：求められる構造改革　一方，ピアノ輸出量では2005年の12万台をピークに下降を続け，2016年には2万5000台まで低下した。この数字は国（楽器協会）が業界に対して厳しい評価を下した要因の一つと見られ，その背景には，世界に冠たるピアノ生産大国でありながら市場でのローエンドイメージが拭えず，音楽祭やコンサートでは著名なピアニストから中国製ピアノがほとんど採用されない現状，歴史ある音楽ホールにも中国製コンサートグランドピアノがほとんど納入されていないなどの事情から，国家指針である「中国製造（ものづくり）2025」政策の重点課題として，ピアノ製造業界への以下の「天の声」となったものとも推察される。

中国楽器協会は，ピアノ製造業界に向けた「構造改革のための中期計画（2016-2018）」を2016年第6期に公表した。長文の記事のキーワードは二つ，一つは「三品戦略」，もう一つは「ミドル・ハイエンドへの転換」である。三品つまり品位，品質，品牌（ブランド）力向上による，新たな中国ブランドイメージの創成，また従来のローエンドから高付加価値，ミドル・ハイエンドへ転換を図ることで，「中華の老舗（しにせ）」の伝承と復興を目指す，というものだ。

海外交流で品質向上を図る　中国楽器協会は早くから海外との友好交流にも注力し，業界に新たな政策推進の役割と任務を与えている。同協会の傘下に中国ピアノ調律師分会がある。調律師分会が世界組織である国際ピアノ製造技師，調律師協会（IAPBT：International Association of Piano Builders and Technicians）に加盟したのは1999年の日本（静岡県浜松）大会で，それ以降はピアノ技術者の国際交流は常態化の感がある。2012年にはIAPBTの分科会であるアジアピアノ技術者協会（APTA：Asia Piano Technicians Association）創立メンバーの一員として各地の支部活動また米国など海外の協会支部との交流に注力している。ピアノ調律師の多くはピアノ製造企業に所属しており，「中期計画」推進を担う中核メンバーでもある。2016年に行われた「中国ピアノ調律業種技能コンクール」には全国から400名のピアノ調律師が参加し，決勝大会に残った上位10名のうち5名は広州珠江ピアノの技術者だった。同社のゴールドメダル受賞には党の指針「国家一流職人」の体現との評価が伝えられた。

2014年に東京で開催されたAPTA会議のある一日，都内の楽器店巡りの地下鉄の中で中国代表団の一員がふと私に語った言葉がある。「日本の工場の生産ラインの作業者を見ていると，規格や標準が完璧にそこで仕上り，後工程の検査はほとんど形式的なもの。私たちが学ぶべきは正にこの作業精神だ」。私はこの言葉に，かつて広州ピアノ工場見学で「品質」を耳にした時に覚えた空疎な記憶が脳裏に甦った。

協会誌には，中国が今日，ピアノの生産大国，世界最大のシェアを持つ業界に成長したとの文言が溢れているが，私には代表団員の言葉にこそ「品質」の有り様を真に理解した，生産大国への成果に優るとも劣らない，技術者の成長の足跡に触れた感じがした。

たなか・りょうじ　日本ピアノ調律師協会国際局参与